



右/入社のきっかけにもなった免震装置(写真は積層ゴム支承)。九州支店の新社屋にも導入されている。
左/昨年行われた「けんせつ小町活躍現場見学会」。参加した子供たちは木枠に自分でデザインしたモザイクタイルを貼り付け、見学会の思い出として持ち帰った。



私の
業務
komachi's
point

事務所長・阿部由美は一九七六(昭和五十二)年に兵庫県で生まれ、中学生の時に経験した実家の建て替えを契機に将来展望が広がっていく。「実家を設計した建築家の仕事ぶりを見ていた二つ上の兄は『面白い仕事があるんだな』と特に感銘を受けたようで、その影響が私にも及び、建築の仕事に興味を持ちました」

兄と仲の良かった阿部は、その背中を追うように建築学科のある大学へと進学を考えていた。迎えた大学入試センター試験直後の一月十七日、阪神・淡路大震災が発生した。その惨状を目にし、さらに地震に強い建物をつくりたいという想いが膨らみ、入学した神戸大学工学部建設学科(当時)で学業に励みながら、復興していく神戸の街並みと共に四年間の学生生活を送った。「構造設計の仕事に就くことを希望していましたが、私が就職活動していた頃はまさに就職氷河期で、就職先の選択肢も少なく厳しい状況でした。このような中、担当教授から勧められたのが『奥村組』でした」

大阪に本社を置く(株)奥村組は、「免震のパイオニア」とも称され、阪神・淡路大震災で倒壊したJR神戸線(東海道線)六甲道駅の復旧に貢献したことも知られている。関西での就職を考えていた阿部は縁を感じて同社に入社した。

入社後、最初に配属されたのは奈良県・橿原かしはら神宮の関連施設の現場で、石工事の担当を任せられた。石を設置した後の工程が多い工種でもあり、その際に傷がつかないよう厳重に養生した。傷がつけば交換となるが、そこは高級資材、そう簡単にはいかない。

「石工事の作業員は、石を慎重に扱いながら施工します。安全帯や施工道具が石に当たらないように常に気を遣う姿を見て、一つの建物がこんなに大事に丁寧につくられていくのかが感動しました。さらには、人と関わりながら仕事を進めていくことの面白さや、建物が完成した時の達成感を十分味わうことができました」

仮囲いの外からではわからない建設業の魅力を実感した出来事だった。それから六年が経ち、結婚した阿部は現場と家庭の両立に限界を感じ始める。

「現場勤務を終えた後に家事をしなくてはならないことにプレッシャーを感じて、現場を続けていく自信を徐々になくしていきました」

会社に相談してほどなく、現場を支援する内勤部署に異動した。二人の子供に恵まれ、二回目の育児休暇明けに、夫が九州支店に転勤することになった。

「主人とは社内結婚で同じ職場に勤めていた

建築への志を堅固にした 阪神・淡路大震災

現場六年、内勤一〇年… そして現場に再挑戦

輝け!

けんせつ小町

所長 阿部由美

(株)奥村組九州支店
建替工事所



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

官民一体となって女性の活躍を強力に推進している建設業界。とはいえ、技術者・技能者全体に占める女性の割合は約3%と依然として低い。結婚や出産・育児のタイミングを迎える30～40歳の層は圧倒的に少なく、今後のキャリアプランに不安を抱えるけんせつ小町も多い。今回はそんな不安を乗り越え、事務所長と2児の母親の立場を両立するけんせつ小町取材した。





施工管理担当の齋藤職員と墨出しの確認をする。「私も子供がいますが、現場と母親の両立は大変なことも多いと思います。ただ、それぞれができることをフォローし合えば現場は回りますから」(齋藤職員)

「建設業は女性であっても生き生きと働け、活躍できる職場であることをもっと大勢の方に知ってもらいたい!」

私の現場
komachi's point



右/北九州市八幡にある新社屋の現場。背後に写る現在の九州支店は1950(昭和25)年に建てられたもの。左/緑化運動の一環として設置した現場入口の植栽。

こともあり、「私も一緒に異動させてください」とお願いするようになりました。九州支店では見積もり業務を担当していたが、免震レトロフィットを採用する現場の支援を命じられた。「支援業務ではありませんでしたが、一〇年ぶりに現場を担当したことで、本格的に現場に勤務したいと思う気持ちが一層強くなりました。今回担当することになった九州支店社屋・寮建替工事について話が持ち上がった時も『担当したいです!』と積極的に発言しました」

再燃した現場への熱意が会社に伝わり、今回初めて所長として現場を任されることになった。

私の仲間
komachi's point



上/八幡ひまわりチームと建替工事に携わる皆さん。下/工事事務所の脇に設置された女性用トイレ。「わがままと意見の境界はとても難しいですが、本社からトイレも整備しましょうという後押しがあって実現できたものです」(阿部)

周囲に支えられてこそ、所長・母親業の両立

職場での阿部の一日は八時の朝礼に始まり、夜の七時までに保育園に子供を迎えに行くことで終わる。所長業には安全、品質、原価、工程、環境管理などがあり、男性所長が行う業務と特段変わりはない。毎日決まった時間に仕事を切り上げることは可能なのだろうか。

「皆さんの協力のお陰で何とかなっています。やるべきことはきちんと責任を持ってやりたいと思っており、ギリギリまで粘りますが、どうしてもこなしきれない場合は他の職員に対応を

お願いして帰ることもあります。その分、周りの職員には確実に負担をかけていると思います」協力会社の中には、帰る時点で作業中の方もいる。そんな時は、施工管理の経験が豊富な齋藤職員に仕事を任せて帰るのが常だ。家に着けば母親の顔に戻る。夕食をつくり、子供たちとお風呂に入った後、洗濯機を二度回す。

「二度目は乾燥までして、翌日に畳みます。最近では十歳になった娘がよく手伝ってくれ、帰宅した時には畳んで置いてあることもあります」子供たちは忙しく働く母の背中を見ながら、環境になじみ遅く成長している。

「周りに助けてくださる方がいるお蔭で仕事も家庭も成り立っています。建設業に携わる方は、想いが伝わり『よっしゃあ、やろう!』と気概を持って動いてくれる人が多くいます。ものづくりは杓子定規に進まないことが多く、それを担う人が意気を感じて動いてくれるからこそ成り立っていくものだと思います」

関係者が互いにフォローし合うことで、現場が一つのチームとなり、物事が前に進んでいく。「女性所長ということではいろいろな方に取材していただきましたが、本当に凄いのは私ではなく、周りの方々なんです」

相手を理解し、機会を与えることが大切

ひとくくりに「女性」といっても、体力面や

komachi MEMO

「九州支店に来てからは、家で家庭菜園をしています。子供が喜ぶので、イチゴは毎年作っていますよ。びよんびよん増えていくのでそのたびに株分けしていたら、ついに10株になりました(笑)」



profile

あべ・ゆみ◎1976(昭和51)年、兵庫県生まれ。神戸大学工学部建設学科を卒業後、1999年に(株)奥村組に入社。6年間の現場勤務を経て現場支援部署に配属。2014年に九州支店に異動。2015年4月より九州支店建替工事に従事し、所長を務める。

工程によって職人さんの入れ替わりも多い建築現場。阿部はできる限り主要メンバー以外の職人さんの名前も覚え、すれ違いざまに「〇〇さん」と声を掛けるようにしている。「私もこの業界は長いですが、女性がいると現場が明るくなりますね」(職長の中山さん)。

精神面はさまざまだ。

「女性にとつて、結婚や出産のタイミングに現場で働き続けるのは正直きついことだと思えます。私は一度現場を離れましたが、結婚や出産の時期だけ内勤にしたり、現場でもフレックステル取得できたりといった制度があれば安心して働いていけるのではないのでしょうか」

女性が積極的に働くことは、就労環境の改善など、社会全体にも良い影響を与えている。

「女性が働ける環境と機会さえ与えてもらえれば、きちんと力を発揮する方はたくさんいると思います。私自身、こういう機会を与えていただいたことが、職場の環境面を含めてとても恵まれていると思っています」

建替工事所では昨年、現場管理を経験してみたい女子大学生・院生を対象とするアルバイトを募集した。見学会もそうだが、現場に不慣れな一般の方を受け入れることになるとケガの心配があり、現場の負担も増える。その一方で、参加した学生からは「こんなに面白い仕事だと思いませんでした」との嬉しい声が寄せられた。「見学会やアルバイトといった機会を頻繁に設けるのは難しいですが、建設業の仕事の面白さを体験する機会をできる限りつくって、新規入職者の確保につなげたいと思っています」

阿部の存在や活躍ぶりをきっかけに、現場と家庭を両立するけんせつ小町が、今後さらに増え続けることに期待する。